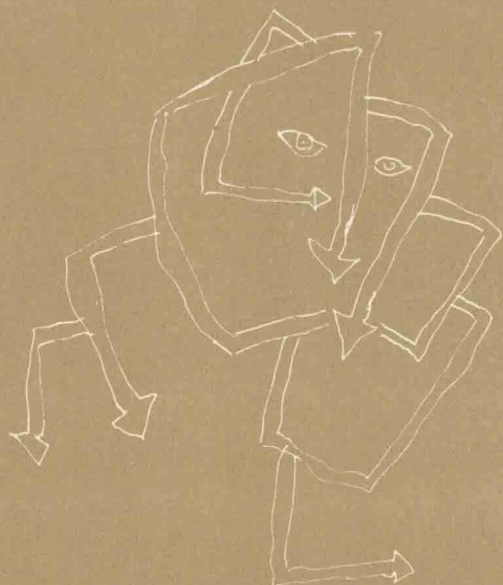


低空飛行・丸谷才一



低空飛行・丸谷才一・新潮社



ていくひこう
低空飛行

著者／丸谷才一（まるやさいいち）



発行／昭和52年5月15日

2刷／昭和52年6月5日

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162／東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話・業務部03(266)5111・編集部03(266)5411



印刷所／塚田印刷株式会社

製本所／新宿加藤製本株式会社



定価／850円

© Saichi Maruya Printed in Japan, 1977

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

低空飛行■目次

I 低空飛行

11

勅語づくし

12

酒の肴

18

兵隊の位

24

街と料理屋

30

終り方が大切

36

野坂昭如は確信犯なりや

42

小佐野さんのムームー

48

金の怨み

54

新聞の値段

60

最上のも

65

ゴキブリの言葉

71

男の運勢

77

Ⅱ 自伝の材料 83

丸やギ左衛門のこと 84

子供ごろ 88

あの年の夏 91

夢判断 95

先生であること 1 98

先生であること 2 103

天井が落ちた話 106

その夜のこと 110

前頭五枚目 113

忘れられない味 115

Ⅲ 肖像画集

117

画家としての福永武彦

118

委細面談

122

大野さんのこと

125

宗匠

128

菊池武一

130

郷愁

136

百メートル十一秒の花嫁

138

友よ熱き頬よせよ

140

変形譚

143

相撲評論家としての吉田秀和

145

中野桃園町

148

彼の釣魚大全

150

友達の本

154

山本森康

158

田辺さんの戦争体験

160

兵士の勇気

163

先輩

168

ドナルド・キーン

169

独断的平野謙論

172

Ⅳ ちよつと文学的

177

ゴシップに強くなる法

178

菓の名前

182

一冊の本

183

一戒

189

二次的文学

192

七月七日のこと

196

雪の空

199

V 田村隆一との付合

205

最初の東京／最初の京都／散歩／
走る／曳く・押す／「人間」／小
堀さんから聞いた話／居酒屋／詩
話／白昼夢／学長の夢／寝室／ユ
トリロのダブリン／カンパチ／微
笑／おまつり／空豆／ドナリー／
書評者としての文学者／イミティ
ション／和田誠／珍竹林／あぢさ
ゐ／つゆのあとさき

Ⅵ おしまひのページで

239

さよならは日本語／遊べや／十貫
坂にて／先生の前／旅の心得／ア
メリカのウォッカ／神様になる／
賭け／挨拶の句／出世魚考／博物
誌／難問

初出一覧

264

装帧／池田満寿夫

低空飛行

I

低空飛行

勅語づくし

昔、勅語といふものがあつた。天皇が書いた（といふことになつてゐる）臣民あての手紙、とても言へばいいかしら。むづかしい漢文口調で、綾錦かしこきあたりにとつては都合のいいことづくめ、青人草あおひとくさにとつては具合の悪いことばかり並べ立ててあつた。一般に言つて、受信者の利益をあれほど思ひ切りよく無視した書簡は珍しいんぢやなからうか。いくら図う図うしい発信人でも、普通はもうすこし相手の立場を考へるものなのである。

子供のころ、わたしはこの勅語なるものが大嫌ひだつた。と言つても、いま言つたやうに、手紙としての常道を踏んでゐないと考へて厭がつたわけではない。わたしの反応はもつと直接的なものだつた。学校の式るとき、校長が教育勅語を読む。白い手袋をはめて、もつともらしい顔で巻物をおしただき、気取つた声で読みあげる。そのあひだわれわれは厳肅にうなだれてゐなくちやならない。このお辞儀が長くて、すこぶる閉口である。ギョメイギョジといふのがおしまひになつた合図で、校長が読み終る。われわれは頭をあげる。子供たちはみんな鼻水をいつせいにすすりあげる。（東北の小学校なのである。）すると先生があとで、鼻水をすすりあげてはいけない、なんて叱るのだが、まあ鼻水のこととはともかく、わたしはあの強制されたお辞儀、頭を深く

下げて恭しくチンブンカンブンを聞く氣持が大嫌ひだったのだ。

もちろんあの文句は、ほかの小學生にだつて判らないし、わけの判らぬものを無理やりに聞かせられるから、小學生はみな勝手に解釈した。「以テ智能ヲ啓發シ」なんて文句は、チノウが東北なまりだからツノになつて、角に毛が生えるといふ意味だと思つてゐた。この手の珍解釈をちよいと進めれば、たちまちパロディに変わるわけで、事実、明治維新以後、最もよくパロディ化された文章は、夏目漱石『草枕』の冒頭でもなければ宮沢賢治『雨ニモマケズ』でもなく、じつにこの教育勅語であつたにちがひない。

しかし、式のとくに強制的に聞かせられるのはまだいい。困るのは、これを書かせられることで、休暇の宿題なんかには、教育勅語を全文書いて来いといふ馬鹿げた宿題がよく出た。中学生になつてからは、毛筆で書いて来いなんて言はれた。仕方がないからせつせと書いて、もうすこしで終りといふところでポタリと墨が落ちたりすると、泣きだしたくなつた。

なかには、修身の試験にこいつを出すなんて言ひ出す教師もゐた。暗誦した上で、いちいち文字づかひまで覚えなきゃならないわけである。「皇祖皇宗國ヲ始ムルコト」では駄目で、「肇ムルコト」「徳ヲ立ツルコト」ぢやいけなくて「樹ツルコト」と覚えなくちゃならない。馬鹿ばかりして仕方がなかつたが、これを下らないと言へば、不敬だとか、日本精神がないとか、愛国心が足りないとか、叱られるのである。

さうさう、戊申詔書といふのもあつたね。「朕惟フニ、方今人文日ニ就リ月ニ將ミ、東西相倚リ、彼此相濟シ……」とはじまるやつで、いまいまいしいことに、ここまでは四十年後の今日でもすらすらと言へる。中学二年のとき、修身の教員が、この戊申詔書を試験に出すと言つたせいで準備したのだ。が、その先生、試験の前に転任してどこかへ行つてしまひ、校長が代りに出題し

て、作文を書かせた。このときわれわれは、校長をむやみに尊敬しましたね。戊申詔書なんてとても覚えきれなかつたからである。

昭和十四年の、青少年学徒に賜はりたる勅語といふのもあつた。教練の配属将校制度ができてから十五年目といふ記念で、今にして思ふと勅語を出すにしては薄弱な理由だが、これは言ふまでもなく、当時、政府としては、金がかからない精神主義しか打つ手がなかつたせいだらう。当節の文部大臣が助けあひなんて唱へるのとよく似てゐる。この「国本ニ培ヒ、国力ヲ養ヒ、以テ国家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル、任タル極メテ重ク、道タル甚ダ遠シ」といふやつは（これもまた癪にさはることに、はじめのほうはすらすら言へる）、短いせいもあつて、むやみに書かせられた。

かういふ下らない文章こそ言葉の綾といふのだと思ふが、もちろんこれは代筆であつて、たとへば、「天佑ヲ保有シ、万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ、昭ニ忠誠勇武ナル汝有衆ニ示ス」とはじまる十二月八日の詔書を書いたのは徳富蘇峯。そして教育勅語は、法務長官、井上毅と侍講、元田永孚の二人の合作である。元田永孚のほうは当時の有名な漢学者で、井上毅のほうだつてすこぶる漢学に詳しかつた。が、かういふ偉い二人が揃つてゐたのに、教育勅語には文法上の間違ひがある。

問題は「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ」のアレバで、ここは絶対、アラバでなくちやいけないといふのだ。これは戦前からすでに問題になつてゐた。いや、明治二十三年十月、教育勅語が発表されたとき、当時、お茶の水高等師範の教授であつた大槻文彦（のちの『大言海』の著者）は、羽織袴で文部省に出頭し、アレバは印刷上の間違ひである、早速アラバと直すやうにと申し立てたが却下された、といふ噂さへあつた由。